

【原著論文】 青年期女子におけるおそろい行動  
— 被異質視不安及び異質拒否傾向・適応感との関連 —

山 田 有 莉

金城学院大学大学心理臨床相談室

**Female adolescent behavior regarding “Osoroi”**

— The relationship between subjective adjustment and anxiety about being seen as different from others and the tendency toward friendship group uniformity —

**Yuri Yamada**

Kinjo Gakuin University, Counselling Room

This study examined the relationship between adolescent anxiety about being seen as different from others and the tendency toward friendship group uniformity, subjective adjustment, and “osoroi” behavior, which is when friends have matching clothes, stationery, and other paraphernalia. The subjects were junior high and high school students at a private women’s school. The findings were as follows: (1) adolescent anxiety over being seen as different from others and the tendency toward friendship group uniformity were related to a sense of solidarity, and (2) few demonstrated “osoroi” behavior. It was also found that “osoroi” was related to an outsider’s perspective.

Keywords : anxiety about being seen as different (被異質視不安),  
the tendency toward friendship group uniformity (異質拒否傾向),  
subjective adjustment (適応感)

## I. 問題

### 1. 青年期における友人関係のあり方

青年期の友人関係はchum-group（保坂・岡村, 1986）のように同質性を重視する関係性からpeer-group（保坂・岡村, 1986）のように異質性を認め合う関係性へと変化する時期とされている。保坂（1998）はchum-groupとは、互いの共通点、類似点を言葉で確かめ合い、その言葉が通じるもののみが仲間であるとしている。しかしその一方で仲間に所属するために青年が努力していることが示されている。天野（1975）は女子が一つの型にはめられたグループに属し脱することの難しさを指摘している。また佐藤（1995）は、高校生女子のグループ所属に対して葛藤状態にあること、閉鎖的なグループを志向する傾向と関連があると述べている。さらに友人関係に関する先行研究では、性差について注目されている（和田, 1993；福岡・橋本, 1995）。よって特に本研究では、女子の友人関係に注目し検討する。

### 2. 被異質視不安と異質拒否傾向

青年期の友人関係について、榎本（2003）は自分たちだけの絆を作り出す閉鎖的活動の存在を指摘し、これは友人関係の移行期にみられる特徴的な友人関係のあり方であり、“独特な文化の中で他者を入れない絆で自分と友人の絆を深めていく”活動であるとしている（榎本, 2003）。また三好（2002）はグループ所属について、一人ではない安心感でつながっており、グループ内の結びつきは情緒的な同質性に基づいていることを明らかにしている。そのためグループは他に対して閉鎖的で異質なものに対して排他的な性質があり、それはグループによってもたらされる表裏の作用であるとしている（三好, 2002）。

これらの研究が指摘しているグループの閉鎖性の概念に近いものとして、高坂（2010）の被異質視不安と異質拒否傾向があげられる。高坂（2010）は友人と表面的な付き合いをしている青年の存在を指摘し、彼らには“異質なものとしてみられることに対する不安”（以下、被異質視不安）があるために友人から異質な存在としてみられないように表面的な付き合いをしていると述べている。さらに友人から異

質な存在としてみられることへの不安は、青年期前期においては同質性が重視された関係であるため、“自分たちとは異質なものを拒否する傾向”（以下、異質拒否傾向）が生じるとしている（高坂, 2010）。さらに、被異質視不安は年齢と共に徐々に低下していくことを示している。

### 3. 親密確認活動におけるおそろい行動

また榎本（2003）は、同質性を特徴とする行動や趣味の類似性で友人関係を保つという親密確認活動を指摘し、この背景には不安感があることを明らかにしている。では同質性を特徴とする行動や趣味の類似性とはどのようなものなのだろうか。先行研究では、青年期の友人関係における共有体験について議論がなされている（セルマン, 1990；高坂ら, 2010；池田ら, 2013）。中学生の友人関係における共有対象とその心理機能に関する研究を行った高坂ら（2010）は、友人と何か共有することで第三者からの評価に影響を与えていると、中学生が感じていることについて指摘している。これは友人との関係を第三者と差異化・アピールしており、何かを共有することが親和的・達成的である一方で閉鎖的・排他的であるとしたうえで、今後の検討の余地を指摘している（高坂ら, 2010）。さらに池田ら（2013）は高坂ら（2010）の結果を踏まえ、友人関係の親密度と共有様式の研究において、物品の共有は仲間間の親密度を低減させ、友人関係を議論する上で重要ではないとしている。しかし、物品は視覚的に認識できるため、視覚化できる同質性によって青年期女子が安心感を得ているのではないだろうか。高坂ら（2010）は共有とは「一つの何かを、あるいは、同じ何かを二人以上が共もつこと」としてあげているが、この中には視覚化できるもの・できないもの、行動やものが混在している。

山田（2017）は、この中でも特に視覚化され、周囲にも分かりやすいおそろい行動に注目し、学術的ではないがより限定し定義することのできる「おそろい」という言葉を用いて検討した。そこでのおそろい行動とは、複数の友人間で意図的に服装、髪型、持ち物を合わせることを指すものとする。全く同じである必要はなく、同じ柄・キャラクター・色違い

など合わせているものが一部であってもよいし、同じアイテムがなくても雰囲気や第三者からみて合わせているとわかればよい。ただし、グループ成員以外の第三者からもらっておそろいになったものはおそろいにするとは定義されていない。また利便性を追求した結果おそろいになったもの（CMで使いやすいと話題になったグローブを部内で購入したところ、おそろいになった）や芸能人の身に着けているものを真似した結果おそろいになったもの（好きなアイドルが身に着けていたネックレスを購入したら、自分の友人も同じものを購入しておりおそろいになった）は除かれている。

筆者はおそろい行動を行う背景には、先行研究で指摘されているような青年期女子の抱える「誰かと一緒にいたい」「ひとりぼっちだと思われたくない」「自分たちの仲間関係を主張したい」という思いがあると考えられる。おそろい行動は、同質性を視覚化して確認することができる媒体である。そのおそろいにする物品は、青年期女子にとって比較的手に入れやすい商品であり、その場の雰囲気・流れ・気分で簡単に変えられるものであり、かつおそろいにしたことで大きな変化をもたらすものでもないと言えよう。彼女たちは身の回りの物をおそろいにするすることで、言葉で確認することの難しい「私たちは仲いいよね」という親密さや一体感、それらから得られる安心感を目で確認し、主張していると考えられる。また身近なものを変化させることで気軽に始め、辞められることもあげられる。さらに身近なものだからこそ、大げさでない（異質ではない）が、グループの親密さを第三者に主張し自分もその一員であることを確認しているのではないかと考えられる。

#### 4. おそろい機能と適応感について

おそろいの心理的機能によって日常生活にどのような影響を与えているのかを検討するにあたり、適応感を用いることにした。適応とは「個人と環境の調和」と定義されている（大久保, 2005）。適応感に関する研究の中で、友人関係と学校適応についての先行研究は多い。中井（2016）は、青年期の親密な友人関係を「特定の他者に対する信頼感」という観点から友人に対する信頼感が学校適応感に影響を及

ぼすことを明らかにした。

さらに親密な友人の存在自体が青年期の適応や精神的健康に大きな意味を持つとしている（中井, 2016）。おそろいの心理的機能では同調性圧力のようなネガティブな機能と、親密さや安心感、既存の友人関係をより発展させるようなポジティブな機能があると予測される。おそろいの心理的機能のネガティブな機能は適応感と負の相関に、ポジティブな機能は正の相関になると考えられる。

## II. 目的

本研究では研究課題を、青年期の親密確認活動におけるおそろい行動—被異質不安及び異質拒否傾向・適応感との関連—と題し、山田（2017）で得られた結果をもとに調査を行った。青年期における友人関係は特に重要であるとされており、特に女子の友人関係の難しさが指摘されている。青年期女子の友人関係を理解することで教育現場におけるスクールカウンセリングなどにおいて、よりよい援助へ繋がると考えられる。なお、以下の仮説をもとに検討する。

仮説1 被異質視不安および異質拒否傾向は、おそろい行動やおそろい感情を介して、おそろいの心理的機能に影響を与えている。

仮説2 おそろいの心理的機能は適応感に影響を与えている。

仮説をもとに、異質拒否傾向及び被異質視不安が並列し、おそろいに対する感情やおそろいの心理的機能を介して適応感に影響を与えるというモデルを想定した（Figure.1）。

## III. 方法

### 1. 調査対象者および実施時期

愛知県内の私立女子中学校・高等学校に通う、中学2年生360名、高校2年生360名を対象に2017年6月に実施し、646名から回答を得た。

### 2. 調査内容

同性の友人を想定してもらい、以下の尺度で構成された質問紙への回答を求めた。

(1) 被異質視不安・異質拒否傾向項目（18項目）：高

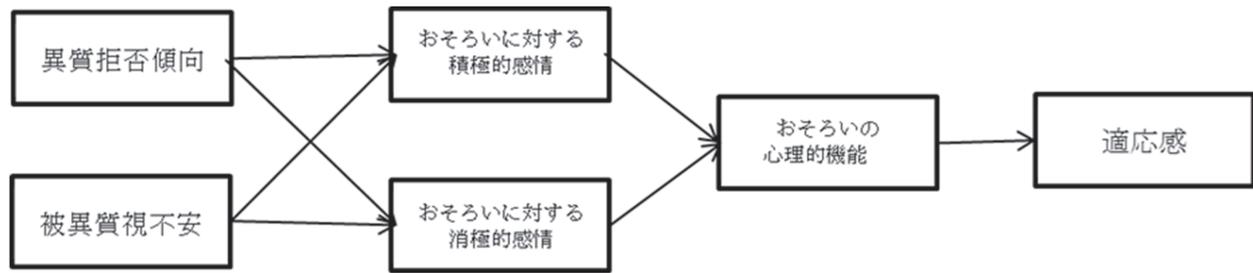


Figure.1 本研究の仮説

坂（2010）の被異質視不安・異質拒否傾向尺度を使用した。山田（2017）で得られた因子分析の結果を踏まえ、全22項目から18項目に変更し5件法で回答を求めた。

(2) おそろいに関する尺度：予備調査で得られた結果をもとに設定した。①おそろい行動に関する項目（10項目）2件法で回答を求めた。②おそろい感情についての項目（6項目）5件法で回答を求めた。なお、おそろいの定義については質問紙に記載した。

(3) おそろいの心理的機能項目（33項目）高坂ら（2010）で作成された共有の心理的機能項目尺度をもとに、おそろい行動の心理的機能項目を作成し、予備調査で得られた結果をもとに設定した。また高坂ら（2010）は、すべての項目が「共有していることで、～」という文章形式であるが、本研究ではすべての項目を「おそろいにすることで、～」という文章に変更した。

(4) 学校生活充実感尺度（15項目）：田島ら（2015）で用いられた大野（1984）によって作成された学校生活充実感尺度項目53項目を15項目にしたものを使用し5件法で回答を求めた。

### 3. 実施方法

調査はホームルーム時間の一部を用いて行った。調査を実施する際には、調査への協力は任意であること、無記名であること、回答を拒否したり中断したりすることができることなどを表紙に明記した。また事前に保護者へ研究についての説明を配布した。また実施にあたり、学内の倫理委員会にて許可を得て実施した。

### 4. 結果

#### (1) 被異質視不安・異質拒否傾向項目に関する検討

被異質視不安・異質拒否傾向項目について、主因子法・promax回転による因子分析を行った（Table.1）。その結果、高坂（2010）とほぼ同様の2因子構造であった。したがって高坂（2010）と同様に第一因子を「異質拒否傾向」（ $\alpha = .92$ ）、第二因子を「被異質視不安」（ $\alpha = .87$ ）とした。

Table.1 被異質視不安・異質拒否傾向項目の因子分析の結果（プロマックス回転後の因子パターン）

項目	F1	F2
第一因子（異質拒否傾向） $\alpha = .92$		
1-13自分とは意見が違う友だちとは関わりたくない	.82	.05
1-12話題が合わない友だちとは話したくない	.81	.00
1-10自分とは違う考えを持っている友だちとはつきあいたくない	.78	-.02
1-8自分の考えとはあわない友だちとはつきあいたくない	.77	-.12
1-16意見が合わない友だちとの関わりは避ける	.75	.02
1-7趣味や関心が違う友だちとは仲良くしようと思わない	.74	-.08
1-18自分と同じ価値観の友だちだけとつきあいたい	.73	.04
1-9共通の話題がある友だちとだけ話したい	.72	.00
1-15自分と同じ考えを持っている友だちだけがいればよいと思う	.51	.18
第二因子（被異質視不安） $\alpha = .87$		
1-3できるだけ友だちとおなじであろうと気を使っている	-.05	.78
1-6友だちから取り残されないように気を使っている	-.03	.77
1-2友だちにあわせなければならないと思う	-.05	.73
1-5友だちと違う意見を言うのが怖い	.05	.69
1-1友だちから浮いているように見られたくない	-.11	.64
1-17友だちから変わった人だと思われていないか不安になる	.06	.61
1-11自分は友だちと同じかどうか気になる	.11	.59
1-4友だちと一緒にいないと不安になる	-.04	.58
1-14友だちの前で目立つことはしたくない	.18	.41
因子相関	.32	

Table.2 おそろい感情の因子分析の結果  
(プロマックス回転後の因子のパターン)

項目	F1	F2
第一因子 (おそろいに対する積極的感情) $\alpha = .83$		
3-4: 私は友人にそろいのものをあげたいと思う	.86	.01
3-3: 私は友人とそろいのものを持ちたい	.81	-.04
3-5: 私は友人とそろえることが大切だと思う	.70	.11
3-1: 私は友人からそろいのものをもらえると嬉しい	.51	-.27
第二因子 (おそろいに対する消極的感情) $\alpha = .70$		
3-2: 私は友人とそろいのものを持つことに違和感を おぼえる	.13	.97
3-6: 私は友人とそろえることが面倒だと思う	-.27	.47
因子相関	-.57	

## (2) おそろい感情についての項目に関する検討

おそろい感情に関する項目について、主因子法・promax回転による因子分析を行った (Table.2)。その結果、予備調査とほぼ同様の結果が得られた。したがって予備調査と同様に第一因子を「おそろいに対する積極的感情」( $\alpha = .83$ )、第二因子を「おそろいに対する消極的感情」( $\alpha = .70$ )とした。

## (3) おそろい行動の有無に関する検討

おそろい行動の有無について以下に示す (Table.3)。

## (4) おそろいの心理的機能項目に関する検討

おそろいの心理的機能項目に関する項目について、主因子法・promax回転による因子分析を行った (Table.4)。その結果、第一因子を「親密感」、第二因子を「負担感」、第三因子を「周囲からの親和的評価」、第四因子を「周囲からの達成的評価」とした。

Table.3 おそろい行動の有無

項目	全体		中学生		高校生	
	はい (人/%)	いいえ (人/%)	はい (人/%)	いいえ (人/%)	はい (人/%)	いいえ (人/%)
1: 私はSNSのアイコンを友人とそろえている (Twitter, LINEなど)	96 (15%)	532 (85%)	80 (24%)	247 (76%)	16 (5%)	285 (95%)
2: 私は文具を友人とそろえている	154 (25%)	476 (75%)	142 (43%)	188 (57%)	12 (4%)	288 (96%)
3: 私は小物を友人とそろえている (キーホルダー, スマホケースなど)	254 (40%)	376 (60%)	181 (55%)	148 (45%)	73 (24%)	228 (76%)
4: 私は休日・週末など外出するとき 服装を友人とそろえている	57 (9%)	573 (91%)	52 (15%)	278 (85%)	5 (2%)	295 (98%)
5: 私はライブ・旅行の時に服装を友人とそろえている	192 (31%)	436 (69%)	77 (24%)	250 (76%)	115 (38%)	186 (62%)
6: 私は学校行事の時に見た目を友人とそろえている	73 (12%)	556 (88%)	44 (13%)	285 (87%)	29 (10%)	271 (90%)
7: 私はアクセサリを友人とそろえている	138 (22%)	490 (78%)	119 (36%)	208 (64%)	19 (6%)	282 (94%)
8: 私はスマートフォンのホーム画面を友人とそろえている	25 (4%)	604 (96%)	23 (7%)	306 (93%)	2 (1%)	298 (99%)
9: 私は部活で服装を友人とそろえている	81 (13%)	546 (87%)	47 (14%)	279 (86%)	34 (11%)	267 (89%)
10: 私は髪型を友人とそろえている	27 (4%)	602 (96%)	22 (7%)	307 (93%)	5 (2%)	295 (98%)

Table.4 おそろいの心理的機能の確証的因子分析の結果  
(プロマックス回転後の因子パターン)

項目	F1	F2	F3	F4		
第一因子 (親密感) $\alpha = .90$						
4-30お互いに励ましあえる	.93	.04	-.16	.04		
4-28一緒に努力できる	.83	.04	-.06	.04		
4-32一緒にいる時間が長くなる	.81	.05	.01	-.03		
4-31楽しい時間を過ごすことができる	.81	-.06	.08	-.07		
第二因子 (負担感) $\alpha = .89$						
4-11相手に縛られていると思うことがある	-.08	.85	.02	-.03		
4-16自分のしたいようにできない	-.03	.85	.06	-.10		
4-17相手に流されている感じがする	.00	.85	.06	-.09		
4-9自分らしさが少なくなる気がする	.06	.84	.01	-.18		
第三因子 (周囲からの親和的評価) $\alpha = .85$						
4-18自分たちは親しいと思われている	.06	.15	.78	-.07		
4-26自分たちは仲が良いと思われている	.24	.02	.74	-.08		
4-1自分たちはみんなから仲良しだと言 われる	-.16	-.19	.66	.39		
4-13まわりから見ても友だちだとすぐに わかる	.08	.15	.60	-.03		
第四因子 (周囲からの達成的評価) $\alpha = .84$						
4-4自分たちは頑張っている	-.03	.01	-.05	.76		
4-6自分たちはまわりからスゴイと思わ れている	.06	.04	-.07	.73		
4-2自分たちの存在が認められている	-.02	-.14	.30	.64		
4-8自分に自信が持てる	.20	-.13	.04	.56		
4-3自分たちはいつも群れているように言 われる	-.05	.10	.34	.54		
因子相関		F1	F2	F3	F4	
		F1	—			
		F2	.03	—		
		F3	.61	.10	—	
		F4	.49	.31	.41	—

## (5) おそろいの心理的機能項目の確証的因子分析

おそろいの心理的機能の各因子とより関連の深い項目を厳選するため、探索的因子分析の結果をもと

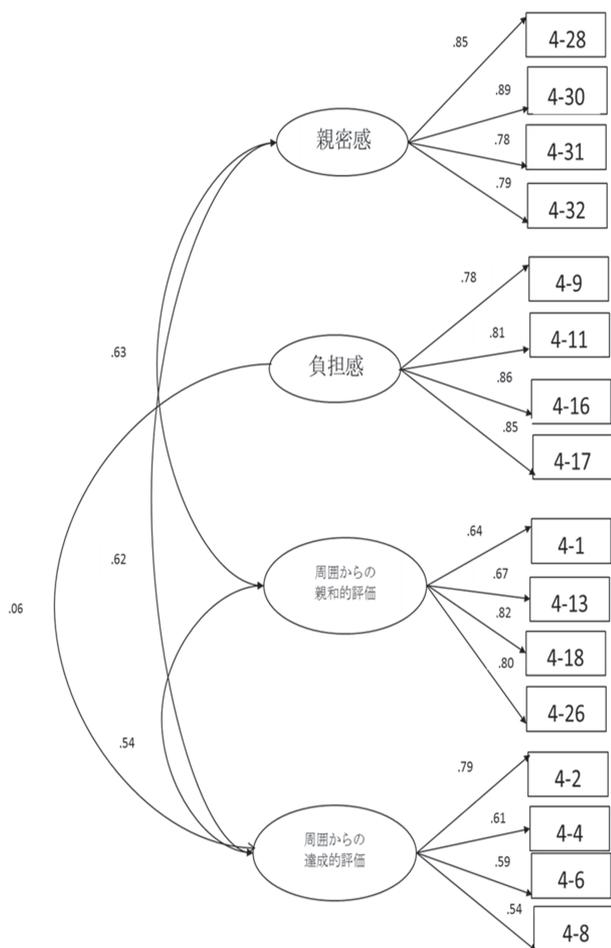


Figure.2 おそろいの心理的機能項目の確証的因子分析の結果

に確証的因子分析を行った。解析の結果をFigure.2のパス・ダイアグラムに示す。矢印は有意なパスを示し、数値は標準偏回帰係数を示す。モデルの各適合度はCFI=.924, RMSEA=.063であり、一定の値であるとしてモデルに採用した。 $\alpha$ 係数を算出したところ、第一因子「親密感」が.90, 第二因子「負担感」.89, 第三因子「周囲からの親和的評価」が.85, 第四因子「周囲からの達成的評価」が.84と十分な内的整合性が認められた。

#### (6) 適応感についての項目に関する検討

適応感に関する項目について、主因子法・promax回転による因子分析を行った (Table.5)。その結果、田島ら (2015) とほぼ同様の結果の3因子構造であった。そのため第一因子を「達成感」( $\alpha=.86$ )、第二因子を「連帯感」( $\alpha=.83$ )、第三因子を「自立感」( $\alpha=.70$ )とした。

Table.5 適応感の因子分析の結果 (プロマックス回転後の因子パターン)

	F1	F2	F3
第一因子 (達成感) $\alpha=.86$			
5-2 : 私は生きがいのある生活をしている	.87	-.01	-.08
5-13 : 毎日の生活の中でものをやりとげる喜びがある	.76	.00	.01
5-1 : 生活は充実感で満ちた楽しさがある	.75	-.10	-.15
5-3 : 毎日の生活にはりがある	.68	-.07	.07
5-15 : 私は価値のある生活をしていると思う	.67	-.12	.07
5-12 : 生まれてきてよかったと思う	.64	-.10	.01
5-14 : 私には毎日の生活の中でなにかへの使命感がある	.45	.22	.22
5-11 : 自分には責任をはたすことに喜びを感じる	.39	.22	.20
第二因子 (連帯感) $\alpha=.83$			
R5-8 : 私ひとりが取り残されているようで寂しい (*)	.12	.89	-.08
R5-7 : だれも私を相手にしてくれないような気がする	.07	.87	-.08
R5-9 : 私をわかってくれる人がいないと思う	-.12	.70	.07
R5-10 : 自分の理想とはかけ離れた今の生き方に焦燥感を感じる	-.16	.48	.13
第三因子 (自立感) $\alpha=.70$			
5-5 : 私は主体的に生きていると思う	.16	-.05	.69
5-6 : 私は独立心が強いと思う	-.14	.04	.63
5-4 : 私は精神的に自立していると思う	.11	-.11	.58
因子間相関			
	F1	F2	F3
	F1	—	
	F2	-.52	—
	F3	.43	-.13

(\*) は反転項目を示す

#### (7) 各尺度間因子相関

次に各変数の記述統計と相関をTable.6に示す。

#### (8) 異質拒否傾向及び被異質視不安, おそろい感情, おそろい機能, 適応感における共分散構造分析

適応感を規定する諸要因の関係を明らかにするために、仮説モデルについて共分散構造分析を行った。

有意でないパスを削除した結果、「異質拒否傾向及び被異質視不安」「負担感」「周囲からの親和的評価」「周囲からの達成的評価」「連帯感」が残り、おそろい感情にはいずれも有効なパスが引けなかった。最終的に採用したモデルを以下に示す (Figure.3)。

また異質拒否傾向及び被異質視不安は並列したモデルではなく、高坂 (2010) のように異質拒否傾向によって被異質視不安が生じるというモデルとなった。矢印は有意なパスを示し、数値は標準偏回帰係数を示す。なお図中では省略したが、負担感と周囲

Table.6 各変数の記述統計量と相関

	M (SD)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 異質拒否傾向	2.04(.76)										
2 被異質視不安	2.67(.77)	.31**									
3 おそろいに対する積極的感情	2.92(.85)	-.04	.27**								
4 おそろいに対する消極的感情	2.47(.96)	.21**	-.06	-.54**							
5 親密感	2.49(.93)	.04	.27**	.47**	-.27**						
6 負担感	2.31(.95)	.19**	.07**	-.39**	.56**	-.01					
7 周囲からの親和的評価	2.93(.92)	.06	.34**	.40**	-.13**	.67**	.18**				
8 周囲からの達成的評価	1.95(.74)	.17**	.38**	.40**	-.07	.55**	.26**	.53**			
9 達成感	3.15(.68)	-.22**	-.11**	.17**	-.16**	.17**	-.12**	.08*	-.01		
10 連帯感	3.86(.87)	-.26**	-.25**	.06	-.23**	-.07	-.28**	-.13**	-.22**	.42**	
11 自立感	3.09(.82)	-.07	-.28**	-.13**	.15**	.00	.07	-.04	-.06	.40**	.14**

\*\* $p < .01$

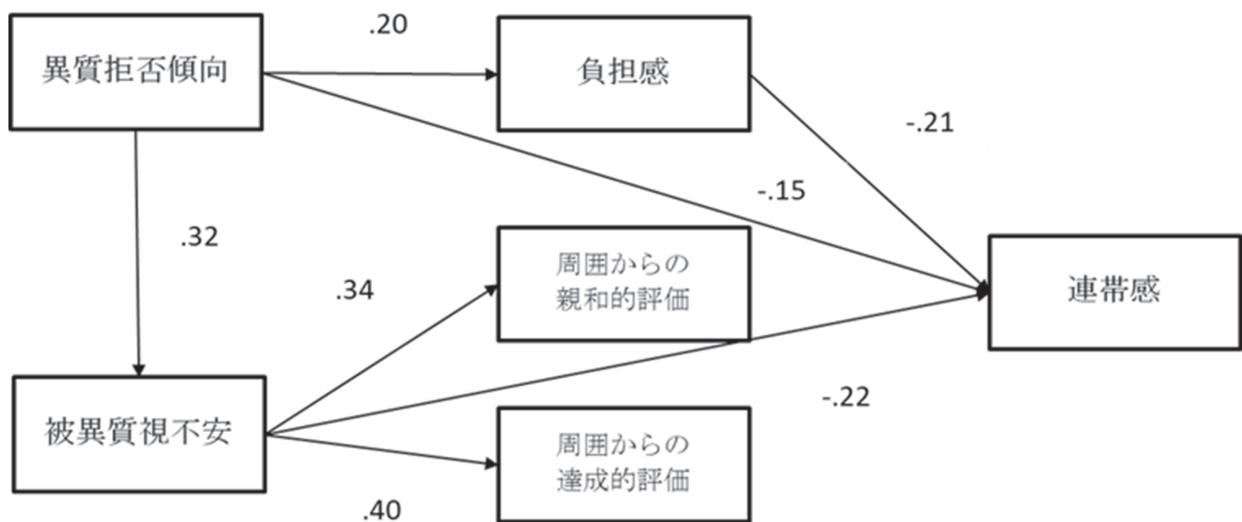


Figure.3 異質拒否傾向から適応感へのモデル図

からの親和的評価, 負担感と周囲からの達成的評価, 周囲からの親和的評価と周囲からの達成的評価の間には誤差が想定されている。モデルの各適合度は  $\chi^2(5)=12.56, p < .05, CFI=.99, RMSEA=.05$ であった。

(9) 中学生および高校生における各尺度の  $t$  検定

被異質視不安および異質拒否傾向, おそろい行動に対する感情, おそろい機能, 適応感それぞれについて中学生および高校生各得点の平均値の差の検定を行った。

被異質視不安・異質拒否傾向を従属変数として  $t$  検定を行った結果, 異質拒否傾向には0.1%水準で有意差が見られた ( $t(611) = -3.50, p < .001$ )。これをTable.7に示す。

おそろい行動に対する感情を従属変数として  $t$  検定を行った結果, 積極的感情には0.1%水準で有意差

Table.7 被異質視不安・異質拒否傾向の  $t$  検定

	学年		$t$ 値
	中学生 (N=309)	高校生 (N=296)	
1. 異質拒否傾向	1.93(.75)	2.16(.75)	-3.76(603)***
2. 被異質視不安	2.67(.78)	2.67(.75)	-.075(603)

\*\*\* $p < .001$

Table.8 おそろい感情の  $t$  検定

	学年		$t$ 値
	中学生 (N=326)	高校生 (N=301)	
1. 積極的感情	3.18(.85)	2.63(.75)	8.64(625)***
2. 消極的感情	2.25(.98)	2.71(.88)	-6.30(625)***

\*\*\* $p < .001$

が見られた ( $t(626) = 8.63, p < .001$ )。消極的感情には0.1%水準で有意差がみられた ( $t(627) = -6.22, p < .001$ )。これをTable.8に示す。

Table.9 おそろいの心理的機能の *t* 検定

	学年		<i>t</i> 値
	中学生 (N=314)	高校生 (N=296)	
1. 親密感	2.62(.99)	2.27(.83)	4.73(608)***
2. 負担感	2.10(.86)	2.38(.87)	-3.94(608)***
3. 周囲からの親和的評価	2.90(.95)	2.94(.87)	-.49(608)
4. 周囲からの達成的評価	1.95(.77)	1.75(.65)	3.44(608)**

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ 

おそろい機能を従属変数として *t* 検定を行った結果、親密感には 1%水準で有意差が見られた ( $t(624) = 4.98, p < .01$ )。負担感には 0.1%水準で有意差がみられた ( $t(616) = -4.06, p < .001$ )。周囲からの積極的評価には 1%水準で有意差が見られた ( $t(627) = 3.78, p < .01$ )。これを Table.9 に示す。

#### IV. 考察

本研究では、中学生および高校生の友人関係において身の回りの品を合わせるおそろい行動について、異質な存在としてみられる不安（被異質視不安）や適応感との関連を検討することを目的とし、仮説に基づいて検討した。

##### 1. 被異質視不安及び異質拒否傾向の青年期における変化

各尺度間の相関を検討した結果、被異質視不安が高いほど友人とおそろいにするに対して積極的であるという結果が得られた。さらに被異質視不安が高いほど、おそろいにする事で周囲から親しいと評価されると感じ、また存在を認められると感じていることがわかった。したがって、他者から異質な者として見られる不安とおそろいにする事で第三者から評価されるという視点に関連があるだろうと考えられる。高坂ら（2010）は共有の対象とその心理的機能の研究で、中学生は共有している対象が自分たちの友人関係に対する第三者の評価に影響を与えていると感じており、友人と友人関係以外に対する第三者とを差異化するものと述べている。

異質拒否傾向・被異質視不安を定義した高坂（2010）においても、異質拒否傾向及び被異質視不安は年齢が増すにつれて低減すると明らかにされている。先行研究では発達に伴い「浅く広くかかわる付き合い方」から「深く狭くかかわる付き合い方」へ

変化する（落合・佐藤，1996）といった、同質性を重視するものから異質性を認め合う関係性（保坂・岡村，1986）へ変化するという一貫した結果が得られている。

また被異質視不安及び異質拒否傾向が高いほど、周囲と一緒にいると感じるような連帯感が低くなるという結果が得られた。これは先述の第三者からの評価に対する敏感さの影響と考えられる。第三者からの評価の中には「仲がいい」という肯定的な評価だけでなく、「固まっている」「孤立している」という否定的な評価もあり、そのような否定的な評価を受けていると感じていることが反映されているかもしれない。また、青年はグループのメンバーを深く信頼し絶対的な安定感を感じているわけではなく、青年がグループからの評価も気にしていることが天野（1975）や黒川ら（2005）などの先行研究で明らかにされている。さらに三島（2003）は男子よりも女子ほうが身近な者からのいじめを多く経験していることを指摘している。したがって本研究で対象とした中高生のグループにおいても、はみ出すのは自分かもしれないという不安が反映された結果とも考えられる。

そして異質拒否傾向はグループから異質な者を排除することで同質なグループを構成しようとするのが、大きな集団からは孤立する二重性を抱えていると言えるだろう。石田・小島（2009）は、仲間集団の閉鎖性は仲間集団への信頼感を低下させ、所属している集団外の成員との交流が低下することを明らかにしている。さらに多和（2012）は、多くの高校生女子が排他されることについて被害的に感じており、排他的なグループに対して、否定せず表面上で同調しているため本音が言えず内的な適応ができないとしている。このようにグループとして固まることで他グループとの交流が乏しくなり、より固まっていくのだろう。以上より、異質拒否傾向や排他性は青年期の友人関係に特徴的な心性でありながらも、心身の不健康やいじめの要因の一つとなっており、今後より検討していく必要があると考えられる。

##### 2. おそろいの項目に関する検討

まずおそろいに対する感情について因子分析を行

い「おそろいに対する積極的感情」「おそろいに対する消極的感情」の2因子とした。各尺度との相関をみてみると、おそろいに対して積極的であるほど、おそろいにすることへの負担感が低く、親密感や周囲からの親和的評価、周囲からの達成的評価が高くなること、またおそろいに対して消極的であるほどおそろいにすることへの負担感が高くなることがあきらかになった。したがっておそろいにすることをどう捉えているかによって、おそろい行動がその人にとってどう機能するのか異なるであろうことが推測された。

次におそろい行動の有無について検討した結果、最も多く「はい」と回答した項目が「3：私は小物を友人とそろえている（キーホルダー、スマホケースなど）」が、45%（254名）と半数に至らず、大多数の者が行う行動と捉えるよりも一定の割合の者が行う行動と捉えたほうが良いと考えられた。中学生、高校生別にみると、中学生のほうが「はい」と回答するものが多く、高校生では全体的に「いいえ」が目立つ結果となった。さらにおそろいに対する感情について、中学生及び高校生の得点の平均値の差の検定を行った結果、積極的感情では中学生が有意に高く、消極的感情では高校生が有意に高いという結果が得られた。これは先述した年齢の変化に伴い、同質性を重視する関係性から異質性を認め合う関係性へ友人関係が変化していく（保坂・岡村，1986）ことが影響しているだろう。石本（2011）は、友人関係のあり方について「友人との心理的距離感」は高校生の方が中学生よりも遠いこと、「友人との同調性」は中学生が高校生や専門学生より高いこと、「友人グループの強固性」は学校段階が上がるにつれて低下することを明らかにしている。さらに大嶽ら（2010）は青年期前期から青年期後期にかけて「ひとりぼっち回避行動」をとる強くこだわりをもった友人関係からほどよく緩やかな関係へと変化し、グループ志向が変化することを指摘している。そしてそれは日々の葛藤の中で付き合い方の習得がなされるためだとしている（大嶽ら，2010）。このように発達に伴い、グループの質や付き合い方が変化し、おそろい行動にも変化があるのではないかと推測された。また最も多くおそろいの対象になっていたもの

は中学生では小物、高校生ではライブ・旅行時の服装であった。このように年齢の変化によって行動範囲や使える金額が変化し、おそろい行動の対象も変化するということがわかった。

続いておそろいの心理的機能について探索的因子分析を行い「親密感」「負担感」「周囲からの親和的評価」「周囲からの達成的評価」とした。それをもとに各因子とより関連の深い項目を厳選するため確認的因子分析を行った。次に各尺度間の相関を検討した結果、上述したポジティブ、ネガティブな機能のほかに、おそろいにすることに負担感を感じているほど周囲と繋がっている感覚が低くなるという結果が得られた。グループの中で相手に縛られたくない、自分のしたいようにできないという、おそろいにすることによる集団への負担感を抱えながら、グループから一人取り残されるような気持ちもある、アンビバレントな状態だろう。山田・岡本（2008）は、「個」は自己に意識を向ける際に生じるアイデンティティ感覚、「関係性」は自己外に意識を向けるときに感じるアイデンティティ感覚とし、「関係性の中の自己の定位」という側面には他者へ向けられる意識と共に自己に向かう意識も関連していることを示している。また三好（2001）は集団での葛藤を解決するために結果として集団により強く一体化する傾向にあることを指摘している。このようにグループでいることと個でいることは相反するのではなく、入り混じって存在していると考えられた。

さらにおそろいの心理的機能について中学生及び高校生の平均値の差の検定をみると、親密感と周囲からの達成的評価では中学生が有意に高く、負担感では高校生が有意に高いという結果が得られた。したがって中学生にとっておそろいにするということはポジティブな意味合いが強いが、高校生にとってはネガティブな意味合いが強いであろうと推測される。なお周囲への親和的評価においては有意差がみられなかった。

### 3. 被異質視不安及び異質拒否傾向、おそろいの心理的機能、適応感における関連性

適応感を規定する諸要因の関係を明らかにするために仮説モデルに基づいて共分散構造分析を行った。



という広い概念ではなく友人関係における満足度などより狭義の尺度を用いるべきだったことが今後の課題である。

## V. 引用文献

- 天野隆夫 (1975) 女子生徒のインフォーマル・グループ アジア文化 10, 87-95
- 福岡欣治・橋本宰 (1995) 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 教育心理学研究43, 185-193
- 榎本淳子 (2003) 青年期の友人関係の発達的变化—友人関係における活動・感情・欲求と適応— 風間書房
- 保坂享・岡本達也 (1986) キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究 4 (1), 17-26
- 保坂享 (1998) 児童期・青年期の発達 下村晴彦 (編) 教育心理学Ⅱ 発達と臨床援助の心理学 (pp.103-123) 東京大学出版会
- 池田幸泰・葉山大地・高坂康雅・佐藤有耕 (2013) 大学内の友人関係における親密さと共有様式との関連 青年心理学研究 24, 111-124
- 石田晴彦・小島文 (2009) 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連～仲間集団の形成・所属動機という視点から～ 愛知教育大学研究報告, 58 (教育科学偏), 107-113
- 石本雄真 (2011) 現代青年における友人関係の特徴と心理的適応との関連 発達研究, 25, 13-24
- 高坂康雅 (2010) 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向—青年期における変化と友人関係満足度との関連— 教育心理学研究58, 338-347
- 高坂康雅・池田幸泰・葉山大地・佐藤有耕 (2010) 中学生の友人関係における共有している対象と心理的機能との関連 青年心理学研究22, 1-16
- 黒川雅幸・三島浩路・吉田俊和 (2006) 仲間集団から内在化される集団境界の評定 名古屋大学大学院教育発達学研究科博士課程紀要, 53, 21-28
- 三島浩二 (2003) 親しい友人関係に観られる小学生の「いじめ」に関する研究 社会心理学研究 19(1), 41-50
- 三好智子 (2001) “個” — “集団” 間葛藤の観点からみた青年期後期の自我同一性の形成過程 心理学研究, 72, 298-306
- 三好智子 (2002) 女子短大生の同性友人グループとのかかわりにおける自己の個別性のあり方—イメージ画を用いた検討— 青年心理学研究 14, 1-19
- 中井大介 (2016) 中学生の友人に対する信頼感と学校適応感との関連 パーソナリティ研究25 (1), 10-25
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) 青年期における友達とのつきあひの発達的变化 教育心理学研究, (1), 55-65
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究53, 307-319
- 大嶽さと子, 多川則子, 吉田俊夫 (2010) 青年期女子における「ひとりぼっち回避行動」に対する捉え方の発達的变化—面接調査に基づく探索的なモデル作成の試み— 対人心理学研究 10 p179-185
- 佐藤有耕 (1995) 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学研究紀要3 (1), 11-20
- Selman, R.L., Schultz, L.H. (1990) Making a friend in youth. The University of Chicago press. どうしたらよい友人関係が作れるか (I巻) 北大路書房
- 田島祐奈・山崎洋史・渡邊美咲 (2015) 青年期における心理的居場所感に関する研究—学校生活充実感と日常的意欲との関連を通して— 學苑 900, (58)-(66)
- 多和沙織 (2012) 高校生女子の友人グループの排他性について 比治山大学大学院現代文化研究科付属心理相談センター, 8, 37-44
- 和田実 (1993) 同性友人関係・その性および性役割タイプによる差異 社会心理学建久 67-75
- 山田みき・岡本祐子 (2008) 「個」と「関係性」概念からのアイデンティティ尺度の作成 広島大学心理学研究, 8, 227-237

山田有莉（2017）親密確認活動におけるおそろい行動—被異質視不安と自尊感情との関連— 金城学院大学大学院 人間生活学研究科論集 17, 9-20